

シンポジウム

生きづらさの先にある孤独死

～団地、災害の現場と向き合う～

報告書 後編

コメント

コメンテータープロフィール

◆小野直哉氏

公益財団法人 未来工学研究所 22世紀ライフエンスセンター主任研究員

福島県いわき市生まれ。

未来工学研究所22世紀ライフエンスセンター主任研究員。
明治国際医療大学非常勤講師。

前号の提言1と提言2の総括をした上で、未来工学研究所の小野さんからはデイスカッションへの導入、問題提起として、以下のようなコメントをいただきました。

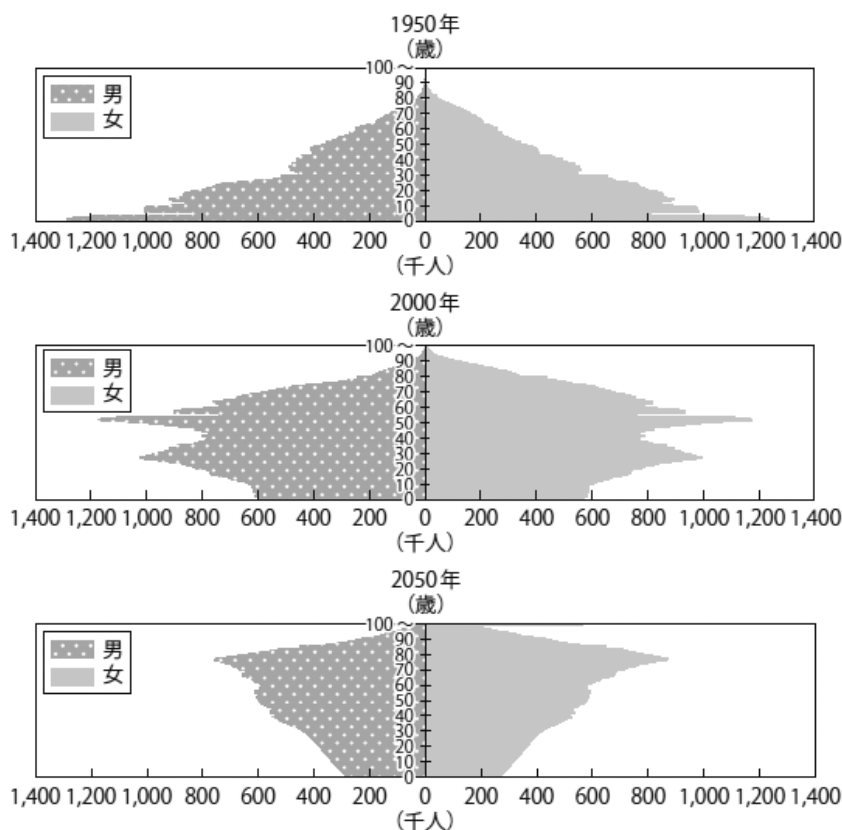
◆人口動態を中心に

いま日本の状況というものは一体どういう背景があるのか。特に日本の人口がどう変遷しているのかを中心にこれからちよつとご説明させていただきまして、その後の議論につなげていくための一つ

の情報とさせていただきたいと思えます。

お示しましたのは国土交通省のデータなんですけれども、2050年ぐらいまでの予想データが出ていて、1億2000万人弱ぐらいの日本の人口が、2050年ぐらいになると、だいたい半分か、それ以下になってしまうという推計が出ています。そして、2050年ぐらいには、ピラミッド型ではなくてミノムシ型のような人口動態になると言われています。

図表 1-1-3 我が国の「人口ピラミッド」の推移 (1950年、2000年、2050年)



資料) 1950年、2000年：総務省統計局「国勢調査」の実績値
 2050年：国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成24年1月推計）」の中位推計より国土交通省作成

これは決して日本だけの話ではないんです。日本が非常に高齢化しているんですが、他の先進国も同様に高齢化している。一方、先進国だけではなくて、それ

以外、日本以外、アジアの国々も全て軒並み高齢化しているのが現状です。ですから、中沢先生のお話にあった孤独死とか、または近藤先生のお話にあっ

たような災害時の高齢者や、弱者の避難の問題というものは、決して日本だけの問題ではないということになります。日本がどう対応できるかによって、海外は日本の様子を見ている。違う言い方をすると、われわれは、知らない間に世界最先端の社会状況になっていること、中沢先生や近藤先生がされていることは、実は世界最先端のことをされているということにもなるということです。団塊だんかいの世代の人たちが、全て75歳以上高齢者になってしまうのが、いわゆる「2025年問題」なんです。この2025年では何が問題かと言いますと、日本人口の3分の1が65歳以上になってしまう。5分の1が75歳以上になる。そうすると、医療費とか介護費用などの社会保障費の問題が非常に懸念けんねんされる。しかしながら、それよりもっと問題なのは、2025年の真の問題は日本人の過半数が50歳以上ということなんです。その中で、孤独死または災害時の高齢者の問題、または障害者の問題が起きている

ということです。

◆超少子高齢・人口減少・独身社会

例えば、東日本大震災の時には、慢性的な病気に對する医療が必要であったという特徴がありました。端的に言えば、若い健康な社会の災害しか想定していない都市型の災害対応だったんです。それ故に、高齢者社会における災害時の医療、対策がなされていなかったということです。

これは、実は、医療だけではなく、全てそうです。若い社会を想定した、政策または行政システム、さまざまな社会サービス、インフラストラクチャーなど。ひとつ例を挙げると信号機の変わる時間もそうです。最近、横断歩道を渡る途中で信号の色が変わり困っている高齢者の方を、よく見かけるようになってきたと思います。若者を想定して街が作られている。

これが、今の日本のわれわれが生きている現状です。「超少子高齢・人口減

少・独身社会」です。その中で、それに伴う地域包括ケアの構築ですとか、または、災害などの有事に對応するために、地域住民同士のつながりが必要だと思えます。

人は、この世に誕生した瞬間から、遅かれ早かれ死ぬんです、必ず。しかしながら、そういう限られた存在であるからこそ、人は尊いんですね。人の尊厳には2種類あります。まず自分自身の尊厳。それから他人への尊厳。例えば、孤独死のときには、死んでいってしまう人は、そういう死に方は望んでいなかったかもしれない。けれども、その孤独死の姿を見て非常に悲惨な感じを受けるというのは、実は残された人たち、われわれの尊厳なんです。

その両方の尊厳。自分と他人の尊厳の保障と具体的な対策というものが、これから必要になるのではないかと思えます。その辺りを中沢先生たちはおっしゃっていたのではないかと、私は思います。

日本は豊かになりました。長く生かされてしまう21世紀。50歳以降の人生が実は後、50年ちかくあります。その間の役割はもうなくなってくるんです。

会社では60歳で定年退職だとすると、だいたい50歳ぐらいで、自分の出世する上限が見えてくるといわれています。そうすると、定年のとき、だいたいどのぐらいの役職か分かりますので、社会的に役割なき役割をどう生きるかということ、いやでも考えなければいけない時代になっている。それに^{こた}応えていく姿勢と具体的な対策が必要です。

宗教関係の方々がかうした問題に對し、こころ、または、考え方や思想というもので応えていくことが問われているかなと私は思います。今後の議論につなげるためのコメントというかたちで、お話をさせていただきました。

パネルディスカッション

コーディネータープロフィール

◆渡邊勝之氏

未来工学研究所 特別研究員、プロジェクト「いのち」代表

博士（鍼灸学）。人体科学会理事、身の医療研究会理事、始原東洋医学会関西西部会講師。学際的研究を行うことを目的として、研究者・医療従事者をはじめ『いのち』に興味・関心を持つ者を構成員とした研究会「プロジェクト「いのち」」を運営中であり、幅広い分野に精通している。主な出版書に、『医療原論（第二版）—いのち・自然治癒力—』（医歯薬出版株式会社）、『医学・医療原論—いのち学&セルフケア—』（錦房株式会社）がある。

これまでご提言いただいた中沢さん・

水上さん・近藤さん、コメントーターの小野さんに加え、コーディネーターとして未来工学研究所の渡邊勝之さん、さらに本願寺派総合研究所から、高橋一仁上級研究員、加茂順成研究員がパネラーとして参加して、ディスカッションが行われました。

◆孤独死の定義

中沢…孤独死は厚生労働省も定義を明らかにしていません。都道府県も、はっきりしていないんですね。私は、孤独死は誰にみとられることなく亡くなるということだと思っています。

近藤…定義ができる定義からこぼれ落ちる人を排除するという可能性もありますので、私はやはり一人ひとりの生と死

の在り方を見ていく必要があるかなと思います。そのため、孤独死、孤立死をあまりここで定義するのは、避けておきたいと思います。

小野…孤独死は、非常に定義が難しい。「お一人さま社会」とか「独身社会」というのは悪いわけではないと私は思っています。ただ問題なのは、それに伴うサポートができていないということなのかと思います。時代の変化とともにシステムが変わるべきだと思っていますので、そのときの孤独死の定義というのも、時代と共に変わる可能性もあると思っています。

◆孤独死にまつわる課題

中沢…孤独死は近所迷惑になるということがあります。例えば、隣の人が孤独死をして長くたつと、ウジ虫が隣のベランダを伝って、ぞろぞろ入ってくる。それから臭いを取り去るのは、簡単ではないんです。だから長引く孤独死は、住宅としての機能を失わせます。

水上…東京都新宿区で孤独死をされた現場を見せていただいたことがあります。そこは資産価値で言うと数千円ぐらいにはなりません。しかし、孤独死をされてしまつて、建物としては、もう役に立たないので、更地に戻して売らないといけません。しかも孤独死した場所だということ、値段がさらに下がつてしまつて。そういう資産価値が下がつてしまつていうのは、実害としてはあります。

近藤…実害があるからという理由だけで孤独死を問題だと言つてはいけないと思つていて、ご本人の生を全うできなかったのかもしれないということも踏まえて、そのご本人の立場になつて、もつと生きたかつただろうなとか、孤独死を迎えるまでの乏し^{はげ}さとか、貧しさとか、悲しさ、寂しさ、そこに寄り添えなかつたことの社会的な課題にももつと目を向ける必要があると思います。

◆人間関係が結びつく基盤とは

中沢…死の問題は同時に、どう生きるか

ということの問題なのです。生き方が孤立しているから孤独死しているんです。おそらく宗教者の皆さんが、この問題で

関心をお持ちになつたのは、この問題がおそろそかにされているからではないかと思ひます。だから宗教者の皆さんには、このころのありようをもつと説いてほしいと思つています。現代社会の中で、このころのありようがどうなつているのかということが大きなテーマではないかと私は思つています。

加茂…つながりが希薄化していることは誰もが感じていることと思ひます。経済成長や効率化の中で、関係性を持たなくともサービスを受けられるとか、そういう要因もあると思ひます。ただ、ふとしたときに「つながつてもいいかな」、「つながりたいな」と、このころが開く瞬間もあると思ひます。団地や災害で、さまざまなか支援を懸命にされてきて、中には支援やケアを拒否する方もいらつしやると思ひます。そういう方の閉じていたところが、ふつと開く瞬間とか、そのために

ケアする側がどう工夫されているのでしょうか。

水上…まずは、見回り活動です。見回りや見守り活動をしていますと、誰が訪問しても出てこない方ですとか、普通にあいさつしているだけで、わりと辛辣な対応をされる方はいらつしやるわけです。ただ、そういう方でも買ひ物はしますし、病院にも行きますし、薬局にも行つたりします。そういう方と自分たちがつながれなくても、第2、第3の方法で、どこかでつながりを持つていくというふうには、新しい訪問体制をつくれるようにしておくことが大事だと思ひます。

中沢…自分が変わらなければ行政も変わらない。公団も変わらない。これは地域が動いていくと、公団も行政も、それに対応するという努力をします。やっぱり地域が変わつていく。地域の中で触れ合ひの関係をつくつていく。これが基本だと思ひますよね。その努力もしないで、行政がけしからんと言つたつてしようがない。やっぱり自分や地域がどう変わる

か。そのことが災害のときにも生きてくるんだと思います。

近藤…あえて乱暴なボールを入れさせていただくと、宗教家にアウトソーシングしない方がいいというのが、私の持論です。つまり、すぐに専門家に頼ると、だいたいその専門分野のことしか考えない関わりの中に放り込まれます。みんな自分の人生に困っていて、防災とか、福祉とか、健康とか、お金の問題とか、人間関係に悩んでいるので、例えばそこに防災だけを持ち込まれるのは、かなり乱暴な扱いだろうと思います。

そういう意味で、これは防災の専門家にとか、これはこころの支援だからカウンセラーにとか、そのような外部意見にすぐに頼らない方がいいかなと思います。そういう点でトータルな人間関係が結びつく基盤が大切になるのではないかと思います。

渡邊…では、平時のときの地域包括ケアと災害時のときの災害事業との関連について、トータルな人間関係が結びつく基

盤は、どのようにしたら、うまく形成できるとお考えですか。

近藤…地域包括ケアというのが現状、絵に描いた餅であることは、みんな知っているのですけれども、その枠組みに、どれだけのいろんな人が平時から関わってくれているかがポイントです。私がよく知っている民生委員さんは、ただ「民生委員」と呼んでいいのかというぐらい、あちこちに出向いて、いろんな関係性を培^{つちか}っていらつしゃる。あまりラベルを貼れないような、大事な豊かな関わりを平時から大事にしていれば、災害時にはおのずと、いろんな人がその隙間を埋めてくれる動き方をします。

例えば阪神・淡路大震災のときも、民生委員の代わりに他の人たちが動いているんです。地域全体のことを見てあげたいという思いを持っている人を、いかに増やすかだと思います。地域包括ケアを絵に描いた餅にしないためには、普段から地域の隙間を埋める活動を、それぞれが見せ合うことじゃないかなと思います。

す。

◆現代社会と宗教者の役割

渡邊…会場から、「無宗教の人々が増えた理由は何ですか」という質問を頂きました。どうですか。

加茂…宗教は、歴史的にも、ずっと必要とされていると思います。人類最古の職業がシャーマンだという説もあるぐらいで、人間が根源的に求めているものというのは、いかに科学が発達しようが求められ続けていると思います。現在の職業がAIの発達によって将来消滅するというショッキングな予測もありますけど、そんな中でも宗教者、こころを取り扱うお仕事というのは、本物であれば残っていくというような予測もあります。

宗教性とか人生哲学とか、そういったものはいつの時代も変わらないけれども、きつと今、僧侶のあり方とか、お寺のあり方、そういったものに厳しい目が向けられているというのもあると思います。

ですが一方で「無自覚の宗教性」というのはよく言われていて、おかげさமாக、お互いさまとか、そういう精神文化って、仏教が必ずしも無関係ではないのかなと思います。宗教性という意味では、ずっとニーズはあると思います。ただ、私をはじめ僧侶の、まだまだ努力不足なのかなと。それが宗教離れの時代に対応できていないのかなと思います。私ただけだと、社会の動きが十分に分かりませんから、今日のような、いろんな有識者の方と一緒に現代社会に応じていくたらいいのかなというふうに考えています。

渡邊…ありがとうございます。そういう危機感も感じて、以前、高橋さんが、いのちのランドデザインということを言われていたと思いますが、簡単にどういう方向性で考えているのか聞かせてください。

高橋…今、社会の中で個別化が進んでいるのは、個別化した方が、やっぱり経済が回るからだだと思います。たとえば一家

に1台の車がシェアされるよりも、2台、3台と買ってくれた方がいいし、どんどん自立という言葉の下で個別化した方が経済は回る。しかしながら、経済が回るからといって、本当に幸福は実感できているのでしょうか。先日、国連が発表した幸福度ランキングで、日本は51位でした。GDPは世界で3番目ですけど、幸福度という意味では50位を下回っている。そう考えたときに、個人的、個人化された社会では満たされない何かがあるんじゃないかなと思っています。それは私にはちょっと分からないので、いのちという言葉で、代用しているのですが、「ここにいてもいいんだ」というようなメッセージだったり、「必要とされているんだ」という実感があったり、そういったつながりを、もう一度復活しないといけないと思っています。お寺は、そういうことをこれまでしてきたのだと思っています。縦軸の時間軸と横軸の空間的つながりをお寺は持っていたんじゃないかと。縦軸の時間軸

とは、過去から自分に向けてつながってきた、いのちのつながり。そして、横軸は空間的つながり。これは、平素から門信徒さんのお宅に参りに行ったりというつながりもあります。

僧侶は、「あなたのいのちを見つめ続けていますよ」というメッセージを、ずっと発信し続ける存在であるし、縦（時間）のつながり、そして、横（いのち）のつながりを共有していけるような寺院づくりができればいいなと思っています。これを寺院を中心にした、「いのちのランドデザイン」と考えております。

渡邊…お寺や神社はコンビニよりも数が多いということを有効活用したコミュニティを再構築していく必要があるんじゃないかということが言われています。コミュニティというものは、コミュニケーションを工夫することです。自然とのコミュニケーション、いのちとのコミュニケーション、自分の体とか自分のところのコミュニケーションのことをコミュニケーション

と言います。そういうコミュニケーションとコミュニケーションの両方合わせたコミュニケーションというのをつくっていく必要があると感じました。共に助け合う、共に育っていく。一緒に悩む。答えは一人ひとり違っていいことです。この一つが正しい答えではなくて、一人ひとり答えは違っていいと思います。コミュニケーションとコミュニケーションを合わせたコミュニケーションというのを、ぜひつくっていききたいというふうに、今日のシンポジウムを通して強く思いました。

おわりに

最後に、提言者の皆さまより宗教者に期待することを、一言ずつお話しいただきますので掲載いたします。

中沢…福祉の問題に関心を持っていただき、福祉を語る僧侶になってほしいと思います。地域の社会福祉協議会に溶け込み、関わりを持っていただきたいと、切

をお願いします。

近藤…誰か、専門家らしき人が出てきて答えを出してくれるなんて思うことが、われわれの生き方を貧しいものにしていったんじゃないかなと思います。ぜひ宗教者の方には、一緒に悩んでいただけで、ありがとうございます。宗教者の皆さんは、地域の事情もよくご存じの方も多いので、地域に末永く関わっていただきたいです。

小野…日本の現状は、超少子高齢・人口減少・お一人さま社会という中で、地域も非常に疲弊している。何か一つの答えはないとは思いますが、宗教が存在する意義があつて、宗教者に存在価値があるならば、どんなかたちでもいいですから、やる気を起こさせることに貢献できる宗教であつてほしい、または宗教者であつてほしいと私は思います。

(終了)

〈総合研究所 教学伝道研究室〉